

「底が突き抜けた」時代の歩き方 315

放射能に汚染された自然の大地に根を生やす人々

－映画『アレクセイと泉』

カナダの東海岸沖に位置するニューファンドランド島を舞台にした映画『 SHIPPING ・ ニュース 』を観てつくづく思ったことは、生活条件の困難な極めて自然の厳しい場所であっても、人間というものは虫の如く嘗々と住みつき、両足をその場所に深く埋め込んで生きつづけてゆく存在だということである。もちろん、あらゆる自然条件に適応して生きる虫や動物にとっては、それは当たり前なことでも別に不思議なことでも何でもない。そのことを考えれば、人間が虫のようにその土地に適応していつて離れられなくなるということも自然なのかもしれない。一度根を生やしてしまえば、外からの来訪者の眼にはどんなに切り立った「崖の上の家」にみえようとも、外からは窺い知れないさまざまな心地よい生活のリズムとスタイルがそこにはかたちづくられているのだろう。

虫や動物は一方的に自然に適応することを通じて、自然が適応してくるのを差し向けているようにみえるけれども、人間の場合はどんなに荒々しい自然が相手であっても、人間が自然に適応する度合いに応じて必ず自然の人間への適応をつくりだす。いいかえると、自然が人間化される分だけ人間も自然化され、自然と人間との相互交流が積み重ねられていく。ただ自然は人間化されなくとも、つまり、自然そのままであっても生きられるけれども、自然でありながら自然の法則から逸脱した人間は、自然を人間化しなくては生きられない地球上での唯一の、自然にとって迷惑な存在であるということを知って忘れてはならない。

チェルノブイリ原発事故で被災した小さな村に暮らす人々を追ったドキュメンタリー映画『アレクセイと泉』(本橋成一監督)について考えると、そんなことが改めて想い返されてくる。この映画はロシア・サンクトペテルブルクの国際映画祭で、グランプリにあたるサンタウルス金賞を受賞した話題作である。本橋監督は産経新聞(02.7.2)で、「作品と縁の深い地で評価されたことはとてもうれしい。大地に足をつけて生きる村人たちを通し『いのち』の深さを見てほしい」といい、「撮りたい」と強く感じた意図について、『いのち』をテーマにして、そこから核をみる。原発被害を真正面から訴える以上に、豊かさを追い求めた20世紀の姿がはっきり見えるのではと思った」と語る。

写真家でもある本橋監督は97年に前作『ナージャの村』を初監督し、私はまだ観ていないが、やはりチェルノブイリ原発事故で被災した小さな村に国からの強制移住を拒否して住みつづける村人たちの生活を、8歳の少女ナージャの目を通して描いている。

今回の『アレクセイと泉』では、34歳の若者アレクセイを中心に生活が映しだされている。ベラルーシ共和国東南部に位置するブジシチェ村もまた、高濃度の汚染で移住勧告を受けたが、600人の村人のうち、55人の老人とアレクセイが残った。村の森も畑も汚染されているが、村人たちが「百年の泉」と畏敬する泉の水だけは放射能が検出されなかった。映画を観れば、百年以上の時を経て地表にこんこんと湧き出るこの「命の泉」こそが56人の村人たちの離村を思いとどまらせ、彼らの生活の支柱をかたちづけていることがわかる。

ウクライナ共和国チェルノブイリ原子力発電所で大爆発事故が起きたのは86年4月26日であり、その2ヶ月後に前年に発足したゴルバチョフ政権によってペレストロイカ路線が打ち出され、3年後に天安門事件、「ベルリンの壁」崩壊、更にその2年後にソ連邦が崩壊している。チェルノブイリ原発事故と同年の12月、ゴルバチョフは反体制活動家のサハロフ博士の流刑を解除し、その際電話で「あなたはモスクワにアパートを持っていると聞いているので問題はないでしょう。あなたが愛国的活動にもどるよう希望します。あなたの手紙にある名前を検討し、多くの者を釈放したが、一部は特殊な種類の人々です」とサハロフに伝えたことについて、博士は「ゴルバチョフ書記長は今や反体制活動家たちが60～70年代に主張していた変革を推し進めようとしている」と発表した。

チェルノブイリ原発事故とペレストロイカ路線の加速とはけっして無関係ではありえない。原発事故は単なる事故なんかではなく、起こるべくして起こったものであり、エネルギー政策の破綻を通じてそこにソ連の国力の低下が顕著に浮き彫りにされていたのである。その原発事故が国家の屋台骨を大きく揺るがせ、「ベルリンの壁」崩壊 - ソ連邦の解体にまで結びついていったことが考えられる。いわばペレストロイカ路線は原発事故の上にレールが敷かれていたのであり、ソ連邦解体という大爆発を惹き起こすことを余儀なくされていたのだ。ゴルバチョフのペレストロイカ路線は、「アフガニスタンの将来はアフガニスタンが決める。アフガニスタンで勇者として倒れた者の思い出はわれわれにとっては神聖である。共産党と政府機関は、戦死者の遺族、その肉親らが配慮、思いやり、善意に取り囲まれるように配慮しなければならない」として、アフガニスタン駐留ソ連軍撤退(88年5月)という対外戦略にまで貫かれる画期的な爆発であった。

ウクライナのキエフ近郊にあるチェルノブイリの原発事故は4号炉の大爆発で、隣接するベラルーシとロシアを含む8万2千平方キロメートルに放射能の灰を撒き散らした。放出量は希ガスを除き約5千キュリー。牛乳、肉、野菜などが汚染され、半径30キロメートルの住民13万5千人が避難した。放射能の70%は北方の白ロシアに飛散し、その地域の住人27万2千人の受けた線量は平均5～6レム。この事故で消防士など31人が直後に死亡したが、被害者の数は00年4月26日、ロシアのショイグ副首相が発表したところによると、事故処理にあたった旧ソ連全体の作業員86万人のうち5万5千人以上がこれまでに死亡し、放射能の被爆者総数は、ウクライナだけで347万7

千人。現在もウラル以西のヨーロッパ総面積（750万平方キロメートル）の4分の3がセシウム137に汚染されている。セシウム137の半減期は30年を要する。爆発した4号炉を覆った石棺の傷みも激しく、更に稼働中の3号炉でも老朽化による事故が相次ぎ、91年10月には2号炉で火災事故も発生し、同発電所の完全閉鎖を決定したのは00年末であった。

事故直後に閉鎖されている筈と誰もが思い込んでいたであろうのに、事故を起こした4号炉以外の他の3つの炉は完全閉鎖まで、なんと14年近くも稼働しており、したがって従業員は放射能を浴びながら働きつづけていたということになる。なぜ閉鎖までにそれだけの時間を要したのかといえば、石棺の強化や電源の開発、失業手当などを計算すると、完全停止に約7億5千万ドルの費用を要するためと推測される。その費用の一部として00年7月の沖縄サミットで、先進7カ国が総額3億ドルの追加支援を決議したのは、放射能の灰はいとも軽々と国境を越えてしまうからだ。現に事故直後、灰は風によって8千キロメートル以上も離れた日本にも達したのである。完全閉鎖されたチェルノブイリ発電所は当然廃墟と化していると思われたのに、最近では観光客が訪れ、「チェルノブイリ王国」という名でテーマパーク視されたり、放射能を浴びた非鉄金属が盗まれたりしているという。

チェルノブイリ原発事故の簡単な概要は以上であるが、チェルノブイリから180キロぐらいいか離れていないアレクセイが住むブジシチェ村のように、ナージャの村も含めて移住勧告に従わずに村人が住みつづける村はかなり多いにちがいない。ブジシチェ村の老人たちが隣村を訪れて交歓し合う光景が映画の中にみられ、孤立しているような気配は窺えない。映画パンフでプロデューサーの神谷さだ子は、ブジシチェ村の汚染度がどの程度のものであるかを記している。

《95年の秋、ゴメリ州チェチェルスク保健局の放射能測定士タチアーナ・ブジリーナさんが「チェルノブイリと同じくらい汚染された森がある」と言って私たちを案内してくれたのが、ブジシチェ村だった。幹線道路から村に向かう森の道にはいと、ガイガーカウンターがピッピッピ...と小刻みな感知音を発する。目には見えない、匂いもない放射性物質は森の灌木の繁みにとどまっていた。広葉樹と針葉樹が程よく混ざり合い、木立から差し込む陽の陰影が清々しい、美しい森。放射能は、この木々の間に浮遊している。1平方キロ当たり60キュリー、100キュリー...。事故直後40キュリー以上が強制移住地域だったことからすれば、汚染度の高さが再認識される。

森を抜けると、畑地が丘状に広がった村が開ける。嚴重監視区域になっているブジシチェ村だ。かつて600人いた村人は、91～92年にかけて、街へ移住していった。ソホーズ・学校・商店が閉鎖されていく混乱の中で、迷いながらも村で暮し続けることを選んだ人たちがいた。うち棄てられたソホーズの広い畑でジャガイモを作る。森にキノコを採りに行く。川で網漁をする。必要なだけの食べ物を作りながら暮らしている。》

映画を一目見ただけでも、ブジシチェ村はカナダのニューファンドランド島と異なっ

て、人々の生活にとっての自然の条件が豊かであることがわかる。ところが、チェルノブイリ原発事故によって一転、放射能の汚染地域になり、人間の暮らしに最も不適格な地域になってしまったのだ。放射能に汚染された野菜や魚、肉などを食べつづけると、やがては白血病に冒されて体を壊し、通常的生活維持が困難となって、死滅するに至る。だから大半の村人は街へ移住したが、年寄りの55人と34歳のアレクセイは残った。おそらく若い世代は将来を考えて子供と共に街へ移り、街での新たな生活に戸惑いを覚える年寄りたちの大半は残ったということだ。では、アレクセイは？ 小児マヒの後遺症が残っている彼もまた、街での生活の困難さを考えて村に踏み止まったと推測される。老人たちにしても、障害を負ったアレクセイにしても、周囲の手助けを必要とする街での暮らしよりも、これまで通り何不自由なく暮らせる村の生活を選びとったのだ、たとえ放射能の灰を浴びつづけても。

彼らは放射能に汚染されることの本当の恐ろしさを知らないようにみえるかもしれない。たぶんそうだろうと思う。放射能などとはこれまで無縁に暮らしてきたのだから、それは当然だ。放射性物質は目に見えないし、匂いもしないので、肌身で危険性を察知しにくい。しかも発症は急激ではなく、じわじわ時間をかけて襲ってくるので、尚更放射能汚染は身近には感じられない。齢を重ねると、なにごと進行がのんびりしているということもある。それでも不安を感じないわけではないが、その不安を解消してくれるのが村の泉であり、若者アレクセイの存在である。放射能が全く検出されない泉の水は、村人たちの暮らしの救いであり、希望なのだ。周囲の環境のほとんどが放射能に汚染されているのに、泉の水だけが汚染されなかったという事実は奇跡に等しかった。そのような「聖なる水」を育てている大地に抱かれて、残り少ない生涯を終えたいという気持ちが募ってくるのは、むしろ自然だと思われる。

長い年月をかけて地中の深くからこんこんと湧き出てくる「聖なる泉」は、強制退去勧告を拒んで村に残った老人たちの一人一人の心の中にもこんこんと希望を湧き出させているにちがいがなかった。それでも力作業に衰えを感じ始めた老人たちが日々の生活を営むには、「聖なる水」以外に若い労働力が必要とされた。それがアレクセイであった。障害を負ってさえいなければ、彼もまた他の若い者たちと共に街に居住して、そこで職を見つけて新たな生活を営んでいたかもしれない。そうなると、老人たちだけの村の残留生活は困難になり、村は廃村の運命を免れえなかつただろう。ところが、軽い障害を負ったアレクセイも年老いた両親と共に残ることになったために、老人たちの残留希望も叶えられることになった。

だが、勘違いしてはならない。アレクセイは老人たちの意向に沿って、自分を犠牲にしたわけではない。老人たちのほうも自分たちのために、無理矢理アレクセイに踏むとどまってもらったわけではない。アレクセイは自分の障害のことを考えて、自ら村にとどまる決心をした。村人たちもアレクセイが残ることを知って、これまで通りの村の生活ができることを素直に喜んだ。映像からそういったことが伝わってくる。彼らの暮ら

しのどこに放射能の汚染が迫っているのだらうと思われるほど、村の老人たちもアレクセイもたぶんこれまでと同じように毎日を生き、生活を楽しんでいるようにみえる。泉の水汲みがあり、薪割りがあり、コンバインの運転があり、鶏や豚、アヒルなどの家畜の世話があり、森林で木を伐採して、飲み水の泉とは別の洗濯場の泉を囲っている板を修復する作業などもある。

老人の男たちが長年の知恵と経験を生かした外での仕事を担えば、老人の女たちはパンを焼き、漬け物を漬けたり、食生活を多彩にするための家事に精魂を傾ける。そして若いアレクセイは力仕事を中心に引き受けながら、実に各々が上手に歯車が噛み合った村の集団の暮らしを維持しているのが一目でわかる。体が動く限り人は働くのが自然という考えが、全身に染み渡っているのが映像からよく伝わってくるとしても、働いているばかりではない。ついこの間まで宗教が禁じられていたとは思われないほど、この村の人たちの信仰心の篤さが画面に滲み出ている。泉の傍には細工を施した手作りの大きな十字架が新たに立てられることになったし、10年ぶりにやってきた若い巡回神父の祝福には心からの満足した表情も浮かべる。人々は賛美歌を歌い、祈りを捧げる。そしてウオッカを飲み、陽気に踊る。リンゴ祭、くるみ祭、収穫祭、十字架祭といった祭りはすべて泉の前で行われ、着飾ってごちそうを食べ、酒を飲み、お喋りに興じる。やがて女たちは娘時代に戻ってはしゃぎ、手をつないで肩を組み、軽やかにステップを踏む。男たちはそんな女たちを眺めながら、酔いつぶれる。

この映画は放射能に汚染されて廃村になり、地図からも消されてしまったブジシチェ村で尚も生活する人々を撮った記録であるが、映画のよさは放射能で汚染された事実よりも、村人たちが恵まれた自然の中で敬虔に生きる日々の暮らしの事実のほうがより前面に大きく映しだされているところにある。つまり、放射能汚染地域でなくても、年老いた村人たちと一人の若いアレクセイの日々の暮らしの映像として観賞することが十分可能な映画になりえていることが、この映画を優れたものにしてているのだ。たとえていえば、本橋監督はブジシチェ村が放射能汚染地域であることを忘れて、村人たちを一心に撮りつづけているうちに映画が出来上がってしまったようにみえるのが、とてもいいのである。

だから、次のような感想が自然に口を衝いて出てくる。

《この映画は、この村がどんなにいいところであるかということ、じつにたんねんに見せてくれる。豊かな大地と、生いしげる草木が人々の生活をゆったりと包み込んでくれる様子は、そこに住んだことのない人々にまでふるさとと実感させてくれるような見事な映像である。それに人々が和気あいあいとしていて、その団らんぶりの楽しさといったらない。老人が老人のための施設ではなく、本来の生活の場でともに老いるとこんなに自信に満ちた笑顔を保ちつづけることができるのかと感動してしまう。そして、それだけでもう、放射能の被害などなんだとばかり、ここに居残る老人たちには納得してしまう。

そして、そう納得したら、この老人たちと共に村に残るアレクセイは、もしかしたら聖者かもしれないと思えてくる。本人が自分では聖者だなんて思っていないらしいところがますます、言葉の本当の意味での聖（ひじり）に見えてくる。》（映画批評家・佐藤忠男、映画パンフより）

もう一つ、新聞（02・6・13付朝日新聞）から拾ってみる。

《美しく着飾っておしゃべりに時間をすごす老女たち。農作業に精を出す酒好きの老いた男たち。コンバインの運転から作業の手助けまで肉体労働の中心になって働く神のようなアレクセイの毎日。人間が生き続けることの素晴らしさ。大切さが、湧き続ける泉の清涼さと対比するようにつめられている。（中略）ウオッカを飲み、ダンスを楽しむ老人たちのなんと美しいことか。》（映画評論家・浅野 潜）

人間の一生に本当に必要なことは、生まれてくることであり、そして死ぬことであり、その間に愛することが膨大に埋め尽くされている。生と死、愛以外のすべては余分なことであろうのに、現代に生きる多くの人々がその余分なことにばかりかかずりにあって年老いていく。この映画を観る（このことも余分に属している）人のほとんどがそうであるからこそ、余分なことが削ぎ落とされた村人たちの生と死、愛に凝縮されていくシンプルな生活に感動を覚えたり、美しさを感じ取っていくのだろう。誠に、「放射能の被害などなんだ」と思ってしまおうし、何度もいうが、そう思うのは自然な感情で、別に奇異なことでない。

しかし、そこに踏みとどまっただけでは見えるものも見えてこない。いくら老人たちとアレクセイの暮らしぶりに感動し、美しさを見出そうとも、やはりそこに高濃度の放射能が覆い被さっているのを見ないわけにはいかない。老人たちは村にいても、息子や娘たちは不在であり、孫たちが飛び跳ねている光景はみられない。若いアレクセイはいても、恋を共に語り合う若い男も、恋を募らせる若い娘もいない。やがて数年後には老人たちは櫛の歯がかけていくように、一人、また一人と村から消えて行き、アレクセイも年を取って一人取り残されていく。更に若い世代がこの村に生まれ育っていくという、どこにでもみられる生命の継承はここでは絶たれている。この村には若い世代が寄りつかないようになっている。そう、村が放射能によって破壊されて、廃墟と化しつつある中での暮らしの美しさであり、感動であるということを見落としてはならない。

何の罪もない人々の慎ましやかな暮らしぶりが静寂のうちに滅びつつある様相が、この映画で凝視されているともいえる。画家・作家の赤瀬川原平は映画パンフにこう書く。《そうやって、言葉でいえばたんたんと村の生活を描いて映画は終わるわけである。ラスト、冬の夜明けの泉にぼつぼつと、村の人々が天秤棒とバケツで水を汲んでは帰る遠景のラストシーン。そこにキャプションが重なり、学校や、橋や、森や、村のあちこちの放射能汚染が順次数字で示され、そのラスト一行に、泉の水の放射能ゼロという数字が出るわけだが…。

ぼくはそのゼロの数字を見て急に胸がこみ上げてきた。思いがけないことだった。近

年映画を見て涙したことなどないのに、この最後の数字一つに一気に襲われた。その数字から映画の全体がもう一度ゆっくりとめくり返されながら、ぼくの胸中にふくらんでくる。スクリーンでは泉の湧水地点がぶくぶくとクローズアップされている。》

さすが画家であり、作家である。観るべき処をきちんと観ている。時が経過すれば、村に人はいなくなる。アレクセイもやがて街に去って行くだろうが、村の泉だけは村人の不在の中でも永遠に湧き出づる。人々が住まなくなっただけで、その場所を廃墟とみなすのは人間の傲慢さだと思わされる。無人の場所でたとえ放射能を浴びながらも、人のように移動できない森はずっと生きつづけるだろうし、植物も汚染された土壌の中から花を咲かせつづけるだろう。なにより放射能にも汚染されなかった「聖なる泉」が、「ぶくぶく」と絶えざる生命を紡ぎつづけている。いつかもう一度この大地に人や犬、猫、家畜などの動物が還ってくるまで、泉を中心に森や草花などが守りつづけているような気さえしてくる。《ぼくにはもう一つ、ただの数字に胸を衝かれた体験がある。長崎にある原爆記念館である。その最後の方のコーナーで、広島、長崎の後の、全世界での核実験の記録が、一年間を約30秒ほどずつに短縮しながら現在までカウントされていく。スクリーンには主たる実験場面が映し出されながら、その場所と日時が次々と出て、実験回数がばたばたと積算されていく。その数字だけ目まぐるしく瞬きながら増殖する様子を、知識では知っていながらも、啞然として見ていた。

いま思うのは、それに匹敵する、というか、それに拮抗する数字が、この映画のラストのゼロなのだった。何とまあ美しいゼロだろうか。》

赤瀬川原平は、人間にカウントされえない自然の世界の懐の深さに驚き、美を感じている。地表に張りつき、地表での戦いに明け暮れている人間の力など及びもしない自然の想像を絶するメカニズムの一端が、村の「聖なる泉」に凝縮されているといわざるをえない。おそらくこの村が辿る運命は我々がいつしか辿る運命でもあるだろう。とりわけ、チェルノブイリ原発事故の40年以上も前に広島、長崎に原爆を落とされ、その被災地のど真ん中に住みつづけるほかなかった人々をかかえる日本人は、この小さなブジシチェ村に起こっている変化をどう見詰めるのだろうか。

村人たちの日常の暮らしが時代を超えた神話の世界での彩りのように映しだされ、「聖なる泉」の清澄さが際立ってくるだけに、より一層この村で生命を終えていくにちがいない老人たちの祝福に対比されて、やがて村を去らねばならなくなるアレクセイの「その後」を想うと、なにかがこみ上げてくる。放射能で汚染された村の生活のほうがか充実していて、放射能で汚染されていない街に移住した生活がもしより多くの労苦と困窮を引き寄せるとなれば、頭の中では勝手に、無人の村にもう一度戻って一人ででも村の泉のほとりで暮らしつづけるアレクセイの姿が鮮明に、力強さを伴って甦ってくる。

2002年7月13日記

